

目次

序言——一九四四年七月二日、土曜日

1

第一章 マウント・ワシントン ……………

21

第I部 崩壊

第二章 苦い平和——一九一八—一九二〇年……………

45

第三章 短かった金本位制度の歴史……………

83

第四章 経済的帰結——一九二〇—一九三九年……………

95

第II部 計画の作成

第五章 狂気じみた提案——一九四〇—一九四一年……………

135

第六章 狂気の大混乱——一九四一—一九四四年……………

161

第七章 ハリー・ホワイトの裏の顔……………

195

第八章 スネークバイト・パーティー——一九四四年六月……………

211

第九章 車輪で運ばれるバベルの塔——一九四四年六月……………

233

第Ⅲ部 ザ・サミット

251

第十章 第一週——割当額戦争……………

253

第十一章 第二週——世界で最悪の議長……………

293

第十二章 第三週——最終的な協定……………

327

第Ⅳ部 ブレトンウッズの生と死

353

第十三章 大いなる不幸——一九四四—四五年……………

355

第十四章 飢餓の窮地——一九四五年……………

379

第十五章 すすめつわもの——一九四六—四八年……………

409

第十六章 ブレトンウッズ体制——一九四七—七三年……………

445

終章——一九七三年以降

471

謝辞

497

注解

501

サミット——訳者あとがき

505

原注

16

索引

1

序言——一九四四年七月二三日、土曜日

集まった客は、これからディナーが給仕されるという時まで、何かが欠けていることに気付かなかった。

大食堂は既に代表団員で混み合っていた。大多数の人は、ネクタイか蝶ネクタイをした正装であった。だがよく見れば、寝不足から目の下に隈をつくり、彼らの足どりが重いことに直ぐに気付いただろう。誰もが疲労困憊していた。彼らは三週間にわたって交渉を続けてきた。ホテルの部屋や廊下、そして地階のバーで、互いに異議を唱えたり酒を酌み交わしたりすることを繰り返してきたのだ。交渉を期限内にまとめるために、ほとんど誰もが徹夜で働いた。

そしてこの時が来た。ブレトンウツズ会議の終幕である。この閉会の晩餐会と総会において、歴史上最も大がかりな経済交渉が成功したかどうか明かされることになっていた。

総会と閉会の晩餐会を同時に行うのは、その二、三時間前になっても、交渉が成功に終わるかどうかが確実ではなかったからだ。ロシアは依然として調印することを拒んでいた。そして、自分たちが参加する際の条件を過去何週間にもわたって強硬に主張してきた。噂によれば、断固とした態度でアメリカに臨むことをスターリン自身がロシア代表団に命令していたという。先行きが分からないという暗い影が落ちていた。これまで一日に二四時間近く働く日々を三週間続け、またそれに先だって、舞台裏で準備に多くの年月をかけたことを考えると、会議は合意に達しないまま閉会してしまうかのように思われた。

ここまで到達できただけでも立派であった。経済に関する世界的に優れた知性の持ち主が、地球のさまざま

まな所から集まった。彼らの多くは旅の途中の攻撃を避けながらの参加であり、捕虜収容所から直接やって来た代表も一人いた。

未だ戦争そのものの帰趨さえ確定していなかった。英米軍は、数週間前にノルマンディー上陸作戦に成功したばかりだった。太平洋では戦闘地域のほとんどを日本が占領しており、その時点ではタイの支配を失っただけであった。勢いは連合国の側に傾きつつあったが、最善のシナリオの場合でさえ、直ぐに戦闘が終わることはないだろうと思われた。

さらに、ブレトンウッズ会議ほどの大きな望みがこれまでに達成されたことはなかった。その目的は、自信過剰と思われるほど壮大であった。国際通貨制度が崩壊し、それが大恐慌（ひいては戦争）の原因となった。その国際通貨制度に替わる、機能する体制を創ろうというのである。それまでに国際通貨制度をうまく修正できた人はいなかった。実を言えば国際通貨制度は、重商主義という初期の時代から、大英帝国が支配的であった金本位制度へと徐々に発達してきた。そして、一九一四年に金本位制度が崩壊した。その後、国際通貨制度は一九三〇年代の大恐慌後に決められた三国通貨協定というお粗末な体制となった。ブレトンウッズ会議の代表たちが試みるようなことを達成しようとする努力は、それまでもなされたが、例外なく失敗に終わっている。

そもそも世界経済を管理する総合的な新制度を実際に施行できるかを考える前に、そうした制度を考案することだけでも難題である。というのは、ブレトンウッズ会議にはある亡霊が付きまとっていたからだ。それは、二五年前のパリ講和会議である。世界の指導者たちは、全ヨーロッパに永続的な平和をもたらすと考えた取決めにヴェルサイユ宮殿の鏡の間で合意した。結果からみると、それは第二次世界大戦の種をまいただけであった。

賠償金が課されたことによって、ドイツ人は恨み骨髄に徹した。また、互いに最大の賠償金額を主張したフランス人とイギリス人の間でも恨みが募った。指導者たちは、金本位制度が崩壊した後に残された、広範な経済的混乱に取り組むことにさえ同意しなかった。全般的な不和が増す原因の一つとなったのは、アメリカが加盟を拒んだことから、国際連盟が実体のないものになってしまったことだ。世界経済の修復を目的として国際連盟が戦間期に会議を時々主催したが、アメリカはほとんど関心を示さなかった。

ブレトンウッズ会議の課題は、全く新しい金融の規則を考えるだけでなく、アメリカが初めて本気で携わることを示すことであった。ブレトンウッズ会議は、二十世紀の国際協調主義が本当に機能するかを占う試金石であり、翌年に予定されていた国際連合の設立の地ならしができるかが問われていた。

少なくとも、そうしたことが公式的な大望であった。しかし、会議に何を望むかを各国の代表に問えば、多くの対立する答えが返ってきただろう。アメリカにとっては、誰もが認める世界の超大国の地位に至ったことを誇示する機会であった。イギリスの双子の目的は、巨額の戦時債務を削減する一方で、できる限り大英帝国の存続を図ることであった。メキシコは、何としても銀が世界の新経済体制において役割を演じるようにしたかった（当時メキシコが銀の最大の輸出国であったことは言うまでもない）。フランスは、主権を持つ経済国家であると認められることを願っていた。そしてロシアと言えば……まあ、最後の晩餐会が始まる前までは、単に交渉を妨害するために会議に参加していたかのように思われた。

多くの人にとって、この晩餐会と閉会の総会に期待できる最善のことは、アメリカのヘンリー・モーゲンソー財務長官が、何らかの仕方でも、苦境に楽観的な解釈を与えることであった。しかしアメリカ代表団の中には、ロシアの参加を確実なものにできないことは会議の失敗を意味すると個人的に認める者もいた。

案の定、ソヴェエトとのいざこざは、お金の問題に集中していた。具体的に言えば、新しい世界経済管理

体制にロシアがどれだけの額を拠出するかであった。そして、閉会までの二四時間に、気難しい雰囲気になっていった。ロシアは丁重で、真面目に会議に参加していたにもかかわらず、譲歩することを拒んだ。さらに各国代表団を動揺させたのは、協定に賛成していると思われるオーストラリアでさえ、閉会の晩餐会まであと一時間しかないという時に、参加する許可をキャンベラから与えられていなかったことだ。

列をなして大食堂に入る時、代表団員たちが知っていたことはこれだけであった。ホテル側は、参加者数を管理できる範囲に絞ろうと必死に努力したが、何百人もの人々がその夜に現れた。寝不足で目がぼんやりした代表団員たちや、ロビイスト、地元のお偉方、報道関係者、そして怪しい押しかけ客までが参加していた。席が確保されていたのは大物だけであり、各国代表団の団長は、主賓のテーブルか、少なくとも、それに近い席に座った。

連合国の全ての国がブレトンウッズ会議に代表を送ったわけではなかった。フランクリン・D・ルーズベルト大統領は、米・英・ソ・中の「四大国」が参加することを主張したが、その他にどの国を参加させるべきかについては討議で決めることにしていた。そして、このことでさえ、ブレトンウッズの他の多くの事項と同様に、イギリスとアメリカの影響力の競い合いになってしまった。イギリスは、ラテン・アメリカと中国はアメリカの前では全くの臆病者だとみていた一方で、アメリカは、ギリシャとインドに対してイギリスが過度の影響力を持っているのではないかと疑っていた。結局、代表団を送る国は四四方国に削られたが、それでもやや多過ぎると思っていたイギリスは、企画全体を「途方もないモンキーハウス」、あるいは、「バベルの塔」と考えていた。

また、言葉の問題もかなりあった。会議で用いられる言葉は、少なくとも公式には英語であったものの、代表団の中には母国語で話すことを主張する者もいた。フランス代表団の団長であるピエール・マンデス

フランスは、廊下で他国の代表団員と出会った時は流ちょうな英語で楽しく会話することができたが、ひとたび委員会室でマイクロフォンのスイッチが入ると、直ぐにフランス語に戻った。それでも、このようなことは英語を一言も話せないロシア代表のミハイル・ステパノフに比べれば格段に良かった。ステパノフとロシア代表団員は、語学力が欠けているのを、超人的なアルコールの消費量で補った。ほぼ毎晩のようにホテルの地階にあるバーやナイトクラブで強い酒をあり、外国の代表団員と意思の疎通を図ることに熱心に努めた。そして、それが徒労だと分かると、ロシア民謡を一齐に歌い出す。そうした姿が見られた。

ソヴィエト代表団員たちの日中は、より一層忙しかった。代表団員と通訳は、予備会議で打ち出された複雑な条件を理解することに半日を掛けて懸命に取り組み、残りの半日には、必死になってモスクワと協議することに務めた。アメリカのある代表団員は後に次のように回顧している。「一方には銃殺刑執行隊があり、もう一方には英語がある。その間でロシア代表団員たちがもがいているように思わずにはいられなかった」⁽¹⁾。

中国代表団の団長である「ダディ」・孔にとっては、英語はさほど問題ではなかった。H・H・孔（正式名称は孔祥熙）は、イエール大学で学び、生涯の多くをアメリカと中国のさまざまな場所で過ごした。そして、共産党が国民党政府を追いやった後はアメリカに戻り、ブレトンウッズから数時間の距離にあるニューヨーク州北部で余生を送った。孔は、文字通り、そして比喩的にも会議の大物であった。丸々と肥えていて愛想の良い孔は、孔子の遠い子孫であり、中国で最も裕福な人物であった。外部の者が、ブレトンウッズにおける孔の本当の目的は最も豪華なパーティを主催することにあると憶測するのも無理はなかった。世界経済を造り替えることは、観察される限りでは彼のアドヴァイザーたちに完全に任されており、現に彼らが交渉に当たった。

モーゲンソーは会議の大部分において、一貫して、下働きは部下のハリー・デクスター・ホワイトに任せ

るといふ態度を取っていた。そのホワイトは、会議全体を通じて一日に五時間以上寝たことはほとんどないと豪語していた。しかし、その最後の晩にステージの中央に座を占めたのは、アメリカ代表団の団長であり会議の名誉議長でもあるモーゲンソーであった。モーゲンソーは、晩餐会と総会での挨拶を三〇分前倒しで始めるという回覧を出した。それは、自分の閉会の辞を全国に生で放送させるためであった。

それ故、ステージの中央に空席があるのを見て人々は眉をひそめた。その時には、孔、ステパノフ、マンデス、フランス、カナダ代表団長の J・L・イルスリーをはじめとする他の全ての主要代表たちはモーゲンソーを囲んで着席していた。

三日前にあたる水曜日の夜遅く、ジョン・メイナード・ケインズは、モーゲンソーとの面談の後で病に倒れた。階段を駆け上がったことが原因である。二人は、その交渉の中では比較的重要度の低い問題を議論していた。それは、国際決済銀行を解体すべきかどうかであった。その後、ケインズはホテルの上の階にある自分の部屋に急いで戻るために駆け上がった。ケインズは、その後しばらくして倒れた。

イギリス代表団のトップが健康を害していることはよく知られていた。ケインズは、五年以上もバクテリア性心内膜炎を患っていた。それは心臓の弁の感染症であり、体力を衰えさせ、心臓発作を誘発する危険があった。ケインズはそれまでに何度も発作に襲われたことがあったことから、会議に臨むに当たっては、このようなことが二度と起きないようにするための配慮がなされていた。大西洋を飛行機で渡るのはなく、船で横断した。さらに、夜遅くに行う仕事の多くは同僚に任せて、長く立ち止まって人と交わりたい気持ちを抑えるよう努めた。

それでもなお、彼の日程は厳しいものであった。「当地での仕事の重圧感はまったく信じられないほどでした」とケインズは本国への手紙に書いている。会議が、国際経済について前例のない新たな規則を一定の時